

I sing,I sing,I sing,I sing,I sing,I am a doll.
I am a doll. I am a doll. Destruction,Stability,
The Awakening,I sleep,I Love You,I Love

I sing,I sing,I sing,I sing,I sing,I am a doll.
I am a doll. I am a doll. Destruction,Stability,
The Awakening,I sleep,I Love You,I Love

アマテウス

下

I sing,I sing,I sing.
I sing,I sing,I sing.
I sing,I sing,I sing.
I sing,I sing,I sing.
I Love You,I Love You,
I Love You,I Love You,
I Love You,I Love You,



ナナツ

I sing,I sing,I sing,I sing,I sing,I am a doll.
I am a doll. I am a doll. Destruction,Stability,

私はその時のことを細部まで覚えていて、すぐに思い出すことができる。

あの時の空の色は透明で、オアシスの水よりも澄んでいた。ガラスでも張ったように美しい空はととてもとても青く、全てを浄化していくようだった。雲は、水彩絵具でうっすら塗ったように、滑らかで触ると溶けてしまいそう。風はなく、形はゆるやかに流れていく。それはまるで日々の象徴するようにゆったりしたものだった。

砂漠も穏やかだ。風がなかったので砂粒は舞い上がらず、眠るように静かだった。太陽の光を吸い込んだ砂は両手ですくうと、ほんのり暖かく気持ちがいい。ぱっと振りまくと魔法の粉のようにきらきらと光を反射し、ゆっくりと舞い降りて、また眠る。

両親は暖かくなった砂粒と同じように、穏やかな笑みを向けていた。父も母も微笑み、私を真ん中に手を繋ぎあう。手は柔らかく、ほのかに甘い匂いがした。

あの時の私はただ幼かった。ただそれだけだ。幼いから楽しく、幼いからなんでもない日々が嬉しかった。

私はあの時のことを忘れない。

親子三人、手を繋ぎあって砂漠で遊んだことを。

決して。

私のきれいな思い出。

どんな宝石よりも輝き、美しく原型を留めている。

包み込むように胸にしっかりと留めておく。

私が消えない限り、この思いは消えない。

たとえみんな死んでしまっても。私がいれば。

思い出はいつまでも形を残して光輝くだろう。

永遠に。

『お父さん』

『どうした？』

『鳥さんがいたの。それでね、それでね……鳥さん、死にそうなの。可哀想』

『どれ……。ああ、傷を負っているね……。早く治療してあげよう』

『うん。……助かるよね？』

『もちろん。早く治療してあげようね』

『うん』

ある日、私は鳥を拾った。あの時の空のように青い、コバルトブルーの小さな鳥を。とてもかわいらしく、美しかった。

青い羽は一枚一枚、濡れたように艶めいて、柔らかいベルベットのような手触りだ。私はまだその時、ベルベットを触ったことなかったが、大人たちがよく「ベルベットのような」と例えて

話していたので何となく感覚で「これがベルベットのようなか」と感じた。

小さな体はとても軽くて危うかった。小さな手でもすぐに殺せそうで怖い。

きっと、枝を手折るよりも簡単で悲劇的だろう。

そう思うと、とてもかわいらしく、美しく、気色悪くて吐きそうだった。その鳥は傷を負っていた。それがますます気味悪さを際立たせていた。

ぐったりとして動かないけれど生きている鳥。私はあまりにもかわいそうになって父に頼んで治してもらおうことにした。

『鳥さん……死んじゃったの……？』

『傷が深かったんだよ……仕方ないんだ』

私は初めて、諦めという表現を覚えた。

—これは、夢だ。そう裏付けるものは何もなかったが、はっきりと「夢」と確認できた。砂漠は湖のようにぴん、と平らに張って黙っている。その上にトレルーズは一人立つ。青い空も凍りつき、植物は一つも見つからない。街もなく、本当に何もなかった。氷結した空間はトレルーズの心音すら響かせない。写真の中にいるようにぽつんとただ立つ。トレルーズは何も考えず……いや、何も考えれず、ただ、手足が動くままに行動する。一歩一歩、少し不安定な調子で歩く。砂漠独特のじゃり、じゃり、と砂粒がこすれ合う音はしなかった。どこまでも静寂が広がる。

無音の中だ。全てに音がなく、砂漠が平らなせいかわずしも進んでいるような気がしなかった。トレルーズ自身もしゃべることを許されない。いや、しゃべることを忘れてしまったのかもしれない。今はひたすら進むことしかできなかった。

ふと静止していた太陽がきらめいた。遠くに何かいる。銀色の髪に金色の瞳。あれは間違いなくナキだ。トレルーズは手を伸ばし、名を呼ぼうとした。しかし、声はやはりでない。

近寄ろうと足を運ばせたが距離は縮まらない。ナキはトレルーズに気づいていないらしく、ただ遠くを見つめて立っている。金色の瞳が細く揺らぐ。

その傍にもう一人、顔を出した。同じ銀色の髪に金の瞳、小さな体……ミリだ。ミリはトレルーズに気づいているのか、じっとこちらを見ている。いつものぽっかりと穴が開いたような虚ろな瞳だ。鏡のようにトレルーズを映している。

ふいにミリが微笑んでナキに手を回した。微笑む……という表現はあっていないかもしれない。ただ口元を引きあがらせただけだ。

ナキ、ミリちゃん。トレルーズは必死にもがいたが、近寄れない。ふいに突風が吹いた。トレルーズは舞い上がる砂粒を避けるように顔を伏せたが、もちろん避けることはできなかった。

砂粒に混じるように銀色の髪がなびく。ミリの髪飾りは解け、より長く揺れた。ミリちゃん……。目を細めながら必死に手を伸ばす。しかし二人の姿は砂粒と同化してさらさらと消えていく。—ミリは、微笑んだ。ざざざざざ。ざざざざざ。

ナキが崩れる。ミリが消える。しかし向こうに誰かいる。

「……？」

—誰？ ミリと同じ顔が立っている。同じように笑っていた。それはミリの成長した姿にも見えるし、別の人物にも見える。

「……！」

喉が悲鳴を上げた。

腹立たしい、そう思ったのは一瞬で、次には言葉にできない激しさに襲われていた。

ああ、この人はどうしてこんなにも走らなければならないのだろう、走らなければ生きていけないのだろう。擦り切れながら砂漠を駆け抜けぬけて、出会った時にはすでに千々に砕けていた。

「5th。俺が数字メンバーになれるって本当？」

声変わりもそろそろか、固まらない小柄な体と切りっぱなしの金髪を揺らし、アルトは訝りながら巨体の5thを見上げた。岩のような体と強面の顔立ちだが、ピンクのアロハシャツと人懐っこく潤む瞳が彼の人の良さを表している。両親のいないアルトの教育係としてずっと一緒にいるが、5thが嘘をついたところなんてほとんどない。ほとんど、というのは大人としての優しさからくるものだとアルトは若いながら知っている。

かといって、今回の言葉はあまりに嘘の匂いがする。

ドラッグコントロールは何十人と戦闘員がいるが、その中でも幹部、数字の付くメンバーの力は強大だ。5thはもちろん強く、統率力も大きい。ムードメーカーでもあった。

「どうして？」

「ありゃ？ 嬉しくないのか？」

「そりゃ嬉しいけど、突然過ぎるし俺はまだ十三歳だよ。他にいるじゃん」

「意外と冷静だなあ。ま、俺はそういう奴が好きだけどな。いい子に育ったよ、アルトは」

大きな手がアルトの頭をすっぱり包み、ぐしゃぐしゃにかき混ぜる。

「やめろって！」

「でもな」

5thは途端、遠い目をした。笑顔は変わらないが目は何かを哀れんでいた。

「ある子を助けてやって欲しいんだ」

乾いた砂は風に乗って旅に出る。果てしのない空を目指して、まだ見ぬ土地へ行くのだろう。小さな砂粒は誰も知らない未来へ行くのだ。

そして、降り積もる砂は過去を埋める。幾層にも重なる時間は目覚めを知らないわけではないが、誰かが起こさぬ限り、静かに眠り続ける。

舞う砂塵の中、スコップが埋れた想いを掘り起こす。かつて歩いた旅人の足跡、眠ってしまった土地、誰かが落とした思い出……あらゆるものがそこにある。それを人々はずっと信じて、だからこそサンドワームという職がある。かつての想いを再び手にしたくて、砂漠を掘り続ける彼らに頼むのだ。

今日の依頼もそんな一粒の想いから来ている。

トレルーズは額を拭くとヘルメットを取った。汗で冷たく感じる風が心地よく髪をさらう。以前ならみつあみが揺れたのだが、今は無理矢理二つに束ねた髪がわずかに跳ねるだけだ。みつあみができるようになるまで、時間がかかるだろう。

スコップを刺し、辺りを見渡す。砂が静まると紺碧の空が一面に広がる。黄金の海と呼ばれる砂漠と共にあると、自分がいかに小さな存在かわかり、言葉にできない恐怖が足元からせり上がる。しかし、トレルーズに恐怖はない。一人ではないからだ。体内には常に美しい歌声が響き、時折懐かしい声で名前を呼んでくれる。

懐かしいと思ってしまうほど遠くに行ってしまったようで、トレルーズはふと寂しくなった。実際はまだ一ヶ月と経っていない。アマデウスの歌はこんなにも鮮やかだ。